



新橋里條  
下

5  
1718  
2





門 創  
編 1718  
卷 2

不空堂



新橋思藤秋之部



思藤子

秋の月や百日即の花乃と  
大の秋の毛髪又高ふ多層々  
大津弦のうちをり秋結立り  
浪磯の妻之又さ〜と秋秋  
初あま秋河原に踏ふ五十串が  
古刀根を舟もさる天の川



天の川湯嶋の臺よあはれこころ

深川三十三郎堂

阿まは川下を舟矢の舟うり  
七日月入あはれや 梳の露  
七夕のあけをきき男世帯り  
短天城おのまはれや しの夜  
七夕のあはれをきき 双六  
あはれをたはれぬや 実のい芋 畠

舟人や返りてはるつをきき  
かゝるやみちのくあはれを  
曾過るあはれをきき 何小袖  
あはれをきき 星のまはれ 長恨舟  
あはれをきき たはれをきき 舟  
あはれをきき 舟人 舟  
梳の露よあはれをきき 女文字

あはれをきき







高き美しきつゆの門火の如  
つゆ人たつゆの心つゆの  
燈籠の心つゆの虫やあらね  
越後屋のつゆ籠の只つゆの  
此やつゆのつゆつゆのつゆ  
車力仁平次妻つゆのつゆ  
つゆつゆのつゆつゆのつゆ  
つゆつゆのつゆつゆのつゆ

つゆの月つゆのつゆのつゆ  
孟冬つゆの月つゆのつゆ  
つゆの月つゆのつゆのつゆ  
つゆの月つゆのつゆのつゆ  
つゆの月つゆのつゆのつゆ

つゆの月つゆのつゆのつゆ  
身のつゆのつゆのつゆのつゆ  
つゆのつゆのつゆのつゆのつゆ



二日云 陽山よのりて

あつて 聲 残り 初めの けしき 以  
て 燈の けしき せしき せしき  
哀 所 せしき せしき 又と 袖の 露  
を と せしき せしき せしき

除扇集

児 二 無き あり せしき 残 君 せしき

伊勢歌

二人の せしき 残 二 何 せしき 何 せしき 君 せしき  
照り あり せしき せしき せしき 秋 せしき  
何 せしき せしき せしき せしき せしき  
葉 飲 せしき せしき せしき 秋 の 残 せしき  
せしき せしき せしき せしき せしき  
月 せしき せしき せしき せしき せしき  
神 風 せしき せしき せしき せしき せしき  
人 せしき せしき せしき せしき せしき



小男は世に致ちぬ角力や  
偏頗るよ月のうらやま  
後々の仕うもさし角力取  
下帯の多結海やけすま  
船妻や島帳のうらやま  
船妻や萩蕙の実成吹ら  
船妻はぬましし初解  
船妻やなくもさしう寸  
船の肉

いたはれまら目とさし  
稻あやいの拔きし梅の釘  
つるつるし掛のむさし  
左浦のあまのさし  
のたのし海土と船  
とさしし海田川へさし  
さしあ  
さしあ  
さしあ

舟中記







朝ふのそとをききしりも九条ふり  
朝ふや陣しりもいふの志のり  
あゝ朝ふ朝ふしりもやまやち  
阿比ふの村よりききしりも  
ききしりもききしりもききしりも  
朝ふやききしりも比次夢の先  
あはふも垣下たふきも物も  
朝ふ朝ふの人をききしりも

朝ふ朝ふやききしりも  
朝ふ朝ふのそとをききしりも  
朝ふ朝ふやききしりも  
朝ふ朝ふのそとをききしりも  
朝ふ朝ふのそとをききしりも  
朝ふ朝ふのそとをききしりも  
朝ふ朝ふのそとをききしりも  
朝ふ朝ふのそとをききしりも

二十五年の夏もききしりも  
ききしりもききしりも



のたまたまいしき城のち城

ありてちまゝに力減りたるの勢なり

八月五日の非之岡島

阿波の海やまゝに力も風船も死

あゝと木槿もあつて日々

中たなまゝに人あゝと赤木槿

是もまゝにあゝけいもあゝあゝ

志中つりつりたるぬ垣根のあゝ

いゝとあゝのさゝあ垣根木槿も難

押もやあゝあゝの垣根のさゝ

不忠

不忠

あゝとあゝとあゝとあゝと

あゝとあゝとあゝとあゝと

あゝとあゝとあゝとあゝと

あゝとあゝとあゝとあゝと

五



こふきしあ、麴の色、さき米のさき  
雀卵をか人の信おもふ家あり花  
むきく萩弁を控さく板弁を  
岩城衆ふ可坊を

小城下や拵板をうり城臺を  
かーや河村をぬりし時

田の富よちの存あり拵拵板  
婿しきさや家のめを申

をいれしあ、塔や甲

若きしあ、お路や男

こまらしてぬきもの味

酒のりも葉菜と祝

過り庵まふし人

古きものわらうや秋のつまね花  
駒買結のさくた口や風仙

七月廿八日深川を極楽八重



聖務のついでに... 寺... 志... 寺... 乙代... 月... 非佛...  
聖務のついでに... 寺... 志... 寺... 乙代... 月... 非佛...  
聖務のついでに... 寺... 志... 寺... 乙代... 月... 非佛...

あ... 年... 女... 旅... 十... を... 侍...  
あ... 年... 女... 旅... 十... を... 侍...  
あ... 年... 女... 旅... 十... を... 侍...



あつたはるのうらみはなほ

あつたはるのうらみはなほ

あつたはるのうらみはなほ

あつたはるのうらみはなほ

あつたはるのうらみはなほ

あつたはるのうらみはなほ

あつたはるのうらみはなほ

あつたはるのうらみはなほ

あつたはるのうらみはなほ

あつたはるのうらみはなほ

あつたはるのうらみはなほ

あつたはるのうらみはなほ

あつたはるのうらみはなほ

あつたはるのうらみはなほ

あつたはるのうらみはなほ

あつたはるのうらみはなほ



うりけいさきとて二句

日無し西月し空のしきと尾を飛  
秋風や人ありくも石りけり  
大筒のうきもとも花さくら

あまの江津きしきの四路

あまのたつぬりしきさき

暮の種や子思素夜を寝りしき  
唐のしき味あまのあれ白の井

庄寺も下船やあまの唐の年子  
浦風やあまのあまの唐のしき

矢吹新田言

鬼灯のしきあまのあまのしき  
今あまのあまのあまのしき

福祿あまのあまのあまのしき

あまのあまのあまのあまのしき

あまのあまのあまのあまのしき

下三



世生の素懐を道らぬる由  
嘉嘉人々々々々々

盛と計ふまは供の稲の白ひ

送別

花のけし門田のいぬやうのま  
早稲のうねをいあひりり村境

市田の小聖村の檢地うたう

見くくくくくくくくく

種のをりーは羅わむや畦つて  
いぬの種よももももももも  
稲の多やううううううう

送別

見くくくくくくくくくく  
荷ひの種ももももももも  
く種くくくくくくくくく  
ま花やあまの土橋の園境



くはまやむかひのさす寸名も十をふ  
六月の中旬よりあつたあつ  
雨は利根の荒川無きいふ  
らなより濁りの川と一時はあま  
き出らうと一は坡塘とえ氏  
屋をたうと一田畑もいもは少  
花たを湖面とあつたりとさ  
しはあかやけと数艘の舟と

催し 縣令の目とさしし 流し  
流船の掌をたまけと信所と傳  
り町とさかたし人あつ配り  
し 湯船とさし 多わらうし  
あつたさる御代のまら  
とさししとや  
あつらる舟の人あや初嵐  
樹蔭のあつたあつた初嵐



尾村亭

阿ふうきや歩芽う原と垣一重

栞杖尾

秋風やさきき山と尾の向

若非子一七日速夜

日あれたふ事しあきけ秋の風

ひらの園の方那西菜ちの常行

三昧會と貞觀年中一并好うり

たのむたさきく急慢うく行さ

うらうらや紫月十四に訪く

秋うきやいも志記經のさき

歩芽生やい先人と秋は風

阿き風やさきけさきく笠のさき

阿き風の吹くさきくは淡路島

あきをやさきうれ安ふさけ墻

節をさきくは母もや秋のさき



続う是や船荷と揚る燈の狂ひ  
似て是のたゞも心多しとらまはれ露  
お路のちる青や 夏仏とりのうら  
るの陰やお路とへく 兎毘  
いとも垣根の法由お土細工  
貞昌大姉の茶毘とやわひ  
よるふ舍利とまを  
けいちちるあしとらと お路の玉

けいちちるあしとらと お路の玉

泣あつてもゑなあり

犬通子の母やあまきまの露  
めくく露と禱つく 聖ちる  
お路のちる青や 夏仏とりのうら  
るの陰やお路とへく 兎毘  
いとも垣根の法由お土細工  
貞昌大姉の茶毘とやわひ  
よるふ舍利とまを  
けいちちるあしとらと お路の玉



有るも世あはれにするものこと  
古海やうらやうと種をなす

火災後筆を心にす

新庭や都の雪の後の後  
暁の露もむきく、氣のく  
蒼とさうり、若く、柳出たとき  
く、裾へ来とねとぬき蟻群  
花苗もあふらうりてあつてあ

は表も我も世にまゝ人々の  
みの虫跡も、秋をききうら  
茶儀の酒も、茶の舟も  
圭岳子の写生も、く、く、く

あつて

端指り、小坂をきく画筆、お  
端柳の飛、寸違屏風、柳  
お、月や鞍とおろき、飛、雲







鳴たしくやうのうちふふのふとつ

若紀仙江たうとまうて遺言わ

こやこま初野うー埋葬きう

こまの喜秋まうていふお

性いあ生ふ滅ちうとまうあき

ますみう川のたう遊戯ー東

山の月ま窪浦きまうて

と般若の吉理まうていふ

菟うぬとま

人いりて風力ありてはよくは男

右九月十八日池端

鴨とまうてまぬやうまう早椿

所思

おまうりりまうてーやおまの秋

身まうてつ終まうてぬ竹婦人

坂の登りや秋まうて阪たのか



八朔の影を晦に庭をうら  
三日月の影を晦に庭をうら

沙崎

待宵やまを仕舞にそよ風を  
待宵やまを仕舞にそよ風を  
末つとるや庭へうらをまきの照  
入る法無法に妙收世妙に

妙と法非二蓮集ら妙法

やふ能月日物とて何もの

常恒不変

死ちぬをいつくはまことの月  
月とて雲のうらをうら  
人丸明神のまつりま

日暮里淨光ちまに良教二句

為迦冥加古よの月よ  
ぬさすよの月のうら



柳身つゝ狂も月見ようらの山  
者信とて舞〜一たまへやふの月  
月今宵あ〜傳も人知老らり  
或〜もけふもつゝ思こらけり  
うぬも大切を捨てこらけり  
月見まや折目の付〜少袖着て  
森路わびく柿むく尚の月見は  
らふわ〜る月見と泣ぬ人のた〜

宵の月見も昔もつゝあはれの月

月見ま〜い舞〜一かきお浮世人

外橋田

名月ま〜る阿を去や掃却為

り善取訪社

名月やのる〜る衆人の聲

こ〜もあ〜る〜

夜とあ〜る〜



名月や後をくまなくおのす

水戸中湊まで

名月やはや〜聞かぬ濱館

芳若ふすつ〜

名月や小倉法美の一軒家

臺子の戦況見て

名月や高き昔々茶の給仕

名月や江戸の〜

名月やち〜酒の〜

名月や植出〜綿の風を〜

羅漢寺

名月や家松の鶴の好〜

名月の入り山遠〜墨田川

名月よと歩行の笑を〜

名月よと月も明〜

〜岩城の海と旅路〜



亭之やま何れかふ夢をよみし越  
 如のやま病床より一葉のふ  
 ふまのふをて従則法識の身は  
 このよりたれ乙二佛の二十三回  
 平しき手おろし一多溶と波ま  
 一葉飯の汁こををて二精靈  
 のこちちちたをておこ持とらる  
 持のこ持をら一乙更て月記一

身とては古の月えてあり  
 菱のこ田舎裏の月のこ中一が  
 身のこ一や何るも月記と根  
 杏井の考持一は月文一  
 ありし友のちをこはり虎の月  
 月落く芦問の鳴は色こ  
 月のこ持をこはし一木城が  
 十のここ月もあかひこおつ



交りの清きるも月よおほしき  
磯の月如くも根ちうつろ  
浪と花ささぎく月ささぎより  
るふれ十五夜ささぎ小舟枕  
月の雨歎きへて樹身一入  
いさよふさぎぬと月ささぎの中  
照ほく鶴の古巣ささぎささぎぬ  
ささぎささぎささぎ月や海の上

おろくささぎささぎ交あり十の夜  
改望月ささぎや舟の志をささ

十九日常盤宮

ささぎも然ひささぎささぎささぎ  
駒曳の土産城殿解の跡  
ささぎささぎささぎささぎの初め  
ささぎささぎささぎの門田ささぎ

大宮驛



鷹の志水川の三坊結あふふ

廿二日北寄り

月明の月より名をききし鷹の志

五万石の澤ちりて

水阿とやうりの浪もあはるをし  
揺りかゝる細の鯉魚や鷹の志  
石の聲うらも及古と来りたり  
石の聲うらも及古と来りたり

わのやうな声うらもあはるをし  
川あわの河をききし鷹や日たり鳥  
此森の葉あもをききし鷹や日たり鳥  
泳魚くは秋の如や日たり鳥  
いり鳥の聲うらもあはるをし  
お祭りとてあはるをききし鷹や日たり鳥  
鶴やとんかくをて昼根のうら  
つららの名跡は浦のうら



朝まゝの籠や掛ふらへ来て暇を

麻島

月又ちく小菰や神のつゝ  
ぬゑあはれも若きくあつるありや  
とほもたふし時角もたまふ若のそ  
わらわのつゝ若もやまゝ若のそ  
しゝのそ月半端の木間へ  
雲のつゝ若もやまゝ若のそ

旅と藤も若若きもあゝ江  
沙魚初の附木もあゝ餅番

田渡村

山あひな若も秋や引板の若  
分あもたなくもあゝかゝ  
人のこぬもりや葉山も繪のそ  
年更の因りもあゝ聖分  
そゝ葉も牛小屋もあゝ聖分



十日新彼岸中日

馬の入振むや袖は月を照  
るはたりのぬもの買ひん  
見と歩行多程の是の思はん  
栗もや彼らんまの袖をけ  
是をさす時白なる西風  
葉の湯若新その虫より露なる

大田城いりへ佐竹氏の

あやをぬりしとるり

西之是は木綿はくちり外搦

直能大師

強頭や鏡よりうつる女形屋  
あやをぬりしとるり  
お場をくくはるはのき  
あつぬ火の消るるはのき



戸志ありなきは信より一葉の花  
うらあ瓜ひと菊うけし菊根が  
さやいと通る人ありう寸瓜  
木屏よ已刻の町計や葉より  
そくまのや物土のそあし現ふ  
一葉よりぬ葉の梅 梅 梅  
里くり菊つと結や柿みり  
林しや仙るの柿とあつたさる

松雲山観音堂より

里くまのあつたさる

柿のあつたさるあつたさる秋の色  
そくまのあつたさるあつたさる  
燈のあつたさるあつたさる煨 芋  
まのあつたさるあつたさる油 燧  
あつたさるあつたさるあつたさる山  
あつたさるあつたさるあつたさる外











棄恩の無為をいふはむかし  
き堀麿のちくひとくしのこき  
ふよあへる重切のりてい  
そくと刺さるちるは信  
新入道し家よりす

年よりけり刺毛も菊のさかひが  
藩の種能くあるやな後の月  
後の月袖柑を捌く事場なる

鶏飼のぬきありや後の月  
後の月ひらくそなきこと  
一坐する他人もなき後の月  
此やしくも月も年皮や袖の黄  
曾過や月も年皮のひらき  
来合さる年よりちる袖を裁く

辻村

新葛まといきしけちり待房



新とまの年際をきり切らば  
新とま又歳とくくあふ口持て

是神の御祭禮

而りてははのつくりやし生美節

莊經神護もややく五百里

ありぬ

菊の盛りたつるはの色遠く

曾子曰脅肩諂笑病干

夏畦

暮の來て海の人や高き人

三品考の印母子上京

朝風や菊の十日を門送る

海舟暮るるの植木屋とも

暮のけとふ二帆を舟にぬ

糸のうらまのやうなは

つらちを造り出さるるを







白きくや白ひ言うて蝶も来は

西条

柴久の鳥お竈のくく如神酒さあ  
柴久の鳥お竈のくく如神酒さあ  
力といふ人よさふやさくのさ  
柴久の鳥お竈のくく如神酒さあ  
山を〜〜向をち〜〜菊をさ  
柴久の鳥お竈のくく如神酒さあ

拾遺抄又志をりぎ〜〜誰人

の巻書をたり〜〜や

古今といろの昔〜〜奴後〜〜わくね

一万五十年はるおもてをあらむまの

日炭俵のうつりさうりわくね

昔のゆりまほまかろうあはじ

良きつ紗糸の白冠の字置さつ

ら〜〜あ〜〜只白く

拾遺抄



かきしをうけも月花のみちか  
あまのうらやふくささるふさうな  
つよき

友よりてお祭より人を送るちり

玉置山村玉置庵古観音堂

滝壺やお祭よりちり口はさり

矢脊よりまゝ人もちりさき

お阿まゝは行もふ三品氏

又中寸

電風もよおちるちりやお祭より  
臭いよ岩の岡よりやお祭より  
祝よりて岩の岡よりお祭より

護國寺

雲つへ駕馬もちりてちりちり  
岩の角のちりちりちりちり  
推の突やちりちりちりちり



高野山林麓

榎のまゝと処女もあがり学文路の  
曾月の入りしや花越鴨

治る西代もあふくも武備又

おら〜〜とたよみて侍大将候

の羽をとりぬ騎歩郎等のこ

〜い六具と〜の旗〜物い

先〜〜とらひあては金巻の兵

糺小荷跡さへ一萬五千一人等

碧衣といふ嶺野とらりし

猪俣雅子とらりし物也とらふ

無実と平樂土の杜観あり

時天保三年辛丑七月五日

いさふ〜や尻鞘〜けて小鷹〜

末〜ゆや小荷跡〜〜一備

兎場〜うちあ〜〜雪木〜



石徑名守の言へし 適者一復  
少一とて 函文をいへるも 誦  
しきり

降もきく人をやすし 秋のくを

鵲岡山 帰館古

聖人の 治るや 考し 秋の暮

亡教をいへし 聖のおまへ

くく 塊の越路の月とま

西のまを丸末右士 追悼

冷やりと 顔又 何やう 秋のくを  
世る 若の 門も 過り 秋のくを  
神代も あはれ 未の 秋の暮  
安米の くら目うぬの 塊のくを  
遠藤の 春中 くらり 秋に暮  
福智原

とらり くらり 秋のくを



協の葉又何もうらみ秋のこゝろ  
小舟よまろけ極の秋の夕の那

若非仙一周忌

秋の山へのあそび月も一巡り

秋山の題をとりてわらわん

舞臺ありぬ

冬夜しそなたまらふの高きう那

露霜のま木もくあまのけ

梅令あつな襟を脱しいよま

品川妙國寺のあつり

ほろりやう

末うれやまゝの持く踊すを

末う神や夕日は木瓜のうら

馬繪言若神松くとうり

ありく

繪言葉のぬらふは又舞や九月あ



色やましく霞のまなや九月畫

三石氏より

九月あまをせまの花のありあゝら

うりあめの旅ねよ

おもひはるも日毎をなめて

老るゝ力な勢まゝや秋のしづか風

続もはや一歩のしづかの方ね

草枕しづか秋をまゝあゝら

木の色やを秋のまゝあゝら

月影出る峰もあゝらあゝら

鶴もあゝらあゝらあゝら

羊穂のまゝあゝらあゝら

大橋

行あまや中洲のまゝあゝら

あま木をまゝあゝらあゝら

あゝらあゝらあゝら



此と世帯ノ車ニ積てあまれわく

泊船ちよきりく

はなみよきりく

り秋や笠着ておろも芭蕉堂

新橋思藻冬之歌

十月や湯木の下路きふくは

年賀

あさりしあまのよらにや九十月

馬の尻如堀や何處迄神ノ道

小多きく藪の口あし神のあま

小舟屋又もの蒼お神のあま



根津權現

神速留守時兩將也  
多々名や園十郎也八代目  
連磨也や楯平のころ栗のい  
多々名や流石の板一棟あり  
をき城也  
多々りつゝきの細さや多枝霜

筑波おろし二つらて八筋

川よりふたふたはたき事

つり一箱二句

その買はたしお家の日  
時句會や三年の旅と徒  
をきと名や承と一度の高  
此色を町をよけり家の日

十日

十の持おろしふきく言持の



わが世をくく交のまに餅やまふつゝ  
家やとを棧欄の光の玄妙の如  
ささ月の子守子まつお夫 謙  
鶴の啼くももはるゑいさ 謙  
あけけし餅の花さくしを式らる  
ふ跡 築の謙中もりの十の如き  
木能くもわ昔のるらほ取こく  
ふみくはる君ふふまの口如の難

莖桐の葉りけさ寸小くさく  
山峰の草をさくさく美小くさく  
つれづれ乃取取わし初時白  
筆とくさくものさくさく 初時白

ふ屋敷おさく寸

まつ時雨林檎の花を白くぬら

宗室志口切

まつ時雨さく 坂まのさく、坂草



あゝ家まゝ

とくして牡丹さゝせる時ふら

位竹ちやふ多うなる春うらふ

たふらふうの架の後摺り

小娘の國へおちたまゝはる

順禮の歌もかみしむあふれ

旭洲をうあのみまゝはる

いふ

小娘の國へおちたまゝはる

破笠の歌もかみしむあふれ

うけて授き採筆九十三

廿二あふれに破笠のまゝはる

社家位竹ちやふ多うなる

春うらふ

たふらふうの架の後摺り

あゝ家まゝ







時晴や餌さきき、竿より、雀

利根舟中

舟より行帆繩を話交霰の那  
黄多の笠もや河と霧しく結  
二日月能く夜多波より結免  
初柳の粉もく新の〜  
時晴の會式乃花の賣妙なり  
町〜夕日の〜時をさかり

早尾

森あまや又の時をの〜  
秋も〜霰有り、酒空り

山上氏旅宿

志〜や兼師も旅森より〜釜  
掬むく好や時を〜  
〜ものた〜  
行燈の下より花や少夜時を



枝をさきく舎輝や大根引  
風のそらしら出しり菜菔曳  
塔の出ぬるり麦まくり和ら那

若菜蒲と通しつたにぬる

の嫩種をひいていりか

あつたをさきつる

麦蒔やま<sup>フナコ</sup>海のあつたを

あつたえりやあつたのあつた葱

あつたえりやあつたのあつた葱

裸にお華ゆりて根深引

呆居して花は清くは蕪汁

あつた許あつたじうあつた根

あつた許あつたじうあつた根

あつた物よりあつたあつた

目よりあつたあつたあつた

趙飛燕



妹身一飛ちらりておむりし

水月抄

物うらみ誰かのうへを冬牡丹  
をほらるる散りしあまのまゝ  
尺の人の袖はあけあり冬牡丹  
冬ほらるる障りありし  
山茶花はふれあきしや吹矢留  
茶の志のあきたり初堂急ぐ物

茶の花や雪ちりしと茶もよ  
茶の花は福しきし  
茶の花やあちりし  
茶の志のあきたり初堂急ぐ物

山茶花前

旅人やいつの頃か花  
年々もやちの留るる



手をのけしとるに馳ぬ帰花  
 日之斜 花のけしとるに帰花  
 見ぬとるに 見ぬとるに 帰花  
 井の心をに 咲とるに 帰花  
 ころり又よき 門の金剛慕る花  
 粒皮と神の垣根のつとまら那  
 すぎすし 老鶴はみりやむら花  
 夢覚て空の日ぬく ひとり花

樵の花こゝきて 狐 畏  
 家根海 乃とるに 乃とるに  
 神の沈びしとる花 翻りしり

蘆野

ありて橋さしや石のうら返年  
 水仙や人知れず花のつと  
 白粥又釣る清し ありて  
 ありて蘇や新しとる垣根の



芭蕉忌通歌

多儼や年々ふかき  
すいぢんや日なかりもあき

洲州ち境内楊枝店の株ぬ

——と楳歌より——

ユ文を流つゝななは城間へ

楳歌のいふはよき

中一山檀林

門前のいんぢやう

桑の火も急ぐ

里姑もや風よ

落葉もく下や

やせり木のおち

花なほはら

おまの抱

い



寒菊や音の世に任花法師  
空華やうりし出ぬりやう細工  
空菊やうりし何うと寸概  
の世の音やう音の世の音  
嘉年宜くも何のやうな垣根が  
加んきくもや何のやうな垣根が

元柳橋と角つりやうの音を食

の世の音やう音の世の音

口阿のうり又築の目らふや枯柳  
里霜の穂田やうりやうの音を食

弘法寺

無業屋又亭楠のこゝろ紅葉  
木塚の音の音の音の音の音  
月又枯日やうの音を食  
安さぬ音の音の音の音の音  
就緒や何れも音の音の音の音



不君池

あまのつら 枯もさや 芽根堀  
さの茶の人やちるは 枯もさや  
為も乃 翅り 枯も 穂も  
さるもさるも 舟もさるも  
楫又 響 臨もさるも 舟もさるも

真夏の入江

うづり 芦やさるもさるも 踊る行

人の世や 疾も 疾もさるも  
あつたや 枯穀地も 火のさるも  
雉子一羽 掘り 枯も 小舎るも  
あつたや 木匠も 枯も 美人も  
あつたや 共の葛も 枯もさるも  
あつたや 善友秋も 誦のさるも  
あつたや 又わ人も 枯もさるも  
あつたや 猶もさるも 枯もさるも



清見寺

関の名やちに残りし冬くさくさ  
道途より一狐の穴や木由木立

神護寺

冬木立岩片し古跡の筆一の跡  
不ありとささう交くう烟能操

狸のつとて

高城又何の籠まると冬月

冬の月若くは松葉枯落つる  
我家所や人の心とく冬月  
冬枯れや無筒の花揚と森ん  
ささ葉や二月も花ふけり  
ささ葉の葉代とく垣ぬり  
手洗しと人行道ぬき十と女  
正月もちく成るを 鶴 鶴  
えつ時木免曳足たり 鶴 目谷



多しりやあらしの嵐も梅変  
ふり多の好風もあつとまれば  
阿つら向ふもあつとまれば  
あつとまれば向ふもあつとまれば  
あつとまれば向ふもあつとまれば

十月十日は既川岸より

浮麻多の好風のもろもあつとまれば  
あつとまれば向ふもあつとまれば

あつとまれば向ふもあつとまれば  
あつとまれば向ふもあつとまれば  
あつとまれば向ふもあつとまれば  
あつとまれば向ふもあつとまれば  
あつとまれば向ふもあつとまれば  
あつとまれば向ふもあつとまれば  
あつとまれば向ふもあつとまれば  
あつとまれば向ふもあつとまれば  
あつとまれば向ふもあつとまれば  
あつとまれば向ふもあつとまれば

加茂川や流石千鳥に袖も鹽



六玉川といふ地名あり

たゞし

調物やして多しとなくわら梨

梅令あけりつとるをく響氏

の舞臺ひきまゝの行もをや

廿年のまゝいふ来ぬまゝに

題跋ささりて

仁右衛門の素襖おとや鳴衛

燈のりゝ踊鞠ふかや鴨の聲

いそなくやまも降るおとふらと

法ある日城脊中ゝ鴨のほぬ哉

月代ゝわいさきか毛乃顔のふ

阿比もちく宛あり出あ鴨はこゑ

まきむき山にそく見る海苔の餅若

青竹ゝ枝つりわく海苔の餅

力多きし草まき枯らるる



たゞも無に見え人か如く暖まる  
ぬくぬく人のうらみもあつぬ

若非高うよの世あつらひ

成見て

つくしと芭蕉におおの夜うら

琉球人來聘 二首

海山やき多計きおのよはあはれ

う免桂うらまの人の口を立ぬ

美北仙百箇日

かきものあつらひのよはあはれ

九つとわらひのよはあはれ

母人のあつらひのよはあはれ

たゞ地砂あつらひのよはあはれ

あつらひのよはあはれ

詠うらみとぬくぬくもあはれ

里も人かきあはれ



——也枯——猶若る鶴の歌く如く  
きりりきりり初籠のりき霜初  
木——也ら——也の結くわき  
木——也ら——也の月わき  
木——也沖籠のりき  
木——也油たのりき  
明屋也風つりき  
木殺風りき

飛くくや津出りの十結物

棹月橋を去る

家々——也産猶おるる落るる  
桃灯のりき氷もや海もり  
物亦出るとる無らりてる  
あきし屋をこるるるるる  
久き我影氷も横もり  
月高りのりき戸も氷橋も



玉河の雪を踏む馬のさくらさく  
鈴のしりの傘はまのつむや玉 花  
松のまはる敷をみりやうり 阪

霜月より鐘石と

南田川にたつと

初雪の煙を霞の灰に吹飛  
み花のこゝろ縄を張るぬい  
松のゆきけしき雪のまふ

初雪の雪のまふ水は光る  
初雪や賤くぬの母る草  
あつてし雪まつる鞋あし  
雪のりやあつる物味は  
し雪のまふな雪や月の暈  
糸又あつる雪の雪  
まらしたる垣ぬや雪の都子  
萱の猶ほまふ雪の雪



雪乃戸や森や山すけり人のこゝろ  
降埋るとも世にちき雪廻庵  
数ちやや留梨のほある雪のこゝろ  
吹きく多果あちつく松あふさ  
以廻寸雪身くまつく初雪あふさ  
狩人の出くわく雪のこゝろ  
雪の日や梅田の雪を堆つてみ

多尾

床の町や雨ちりりて紙菖の雪

晋のころ白子懸索

月夜立のころり價や句商人

つら

うゝ鮭、雪のふらけ海物

十月廿日新標屋敷

梅のころ梅まつりや雪 曇

會津山中



ひとつるに糖魚の森や雪の脊負子富  
 り汁やたゞ珠より雪 案  
 雪志まゝ 暖もささやうう掛  
 舟まゝいもの 影もささ雪志ま  
 まうつれと雪降や尾まゝ新庭さ  
 尺と馬了人さうの 雪や雪道摩  
 尺と馬了人さうの 雪の 雪のけ  
 晴ぬきの次女もけたさうの

→ 阿(な)なるも母まゝらうまゝ

集(あ)まゝらうまゝ

かの世の世まゝの 糖魚や雪の仙  
 居廻りもお引よきて 巨梅のな  
 ねらわや巨つ 雪の 雪の 奥に  
 糖魚の代も尺うけぬまゝつら  
 山まゝのまねれらに  
 かなうまゝの ちまゝの ちまゝの



森迄りみかおきく陽婆ふれ  
たつとも空あけし思ひしんか  
吾人の顔そあけしる炭火うる  
借きつと炭火よこわすおあわ  
すく賣又あつしとわする身か  
幾人のまたりうりてや熊野  
まきのすく孫より山葵の白ひく

旭洲亭ふ

何とも落つてまてやけし

多摩

強とまつ炭を流してあきの月  
うつとみやや折餅とまは孫より  
埋火やまあししの種におあわもの  
降る越さう唄あくや桐空楠  
白くぬの籠さひまき桐火をけ  
ふれあし—空楠の白火元大身と

下







明暮とて 此れ那を 綱代と  
袖とて 此れ那を 綱代と  
新陳の 意を 綱代と  
おれ 綱代と 綱代と  
花と 綱代と 綱代と  
おれ 綱代と

古き代とて 綱代と  
田畑おあり 尾

上人の 衣の 綱代と  
手つとぬ 乃と 綱代と  
空と 綱代と  
古の 綱代と  
撥と 綱代と  
若と 綱代と  
襖と 綱代と  
何と 綱代と







吉人立美の葉の馬のつた  
ふまの葉を流く安田氏の  
櫻置氏祝あ

此らるや日く空臨る多神一の危

三和乃の祝

梅のさくさく若葉の襟の那

新ころま夏買ふや信多子焼心

山休もたのまは吹草紫のり

横ふや誰あつる心新鼓

鉢たをく雪の志あく又西の行

盟のおもひふくをそ新多の起

鉢たをさ器悪く置て中おれ

さふくさく雪の鼓くして鉢叩

ふ木くさく竹の青折く鉢叩

落柿金くものこつてん新叩  
まのたの葉ぬ世あくく口枝嵐



古今著聞集をうらむ

昔よりけしきあはれをうらむ

あはれをうらむ

あはれをうらむ

あはれをうらむ

あはれをうらむ

あはれをうらむ

あはれをうらむ

あはれをうらむ

あはれをうらむ

あはれをうらむ

あはれをうらむ

あはれをうらむ

あはれをうらむ

あはれをうらむ

あはれをうらむ



像前ふむく

笠のしほ箱の堂をさしつれを

儀ハヤ人形提おく玉つをを

いそふ源守ちの舎しむまに

と足津君比良屋のさけを

もさふりなきて

老。為もさ我ふ水ありは仏名

佛。あお西ハ桑のさし丹の

松あり餘あり

門出もよき口よりなりしすめ

年暮ぬは立ふとと白出たて玉の

一風雅もおもひやうましく為

ゆふのよきなは旅森と結寸

くり返寸年浪もや一車一初

くう返し又雨しは残るうまの

屏風絵の梅も白ふや一車一初

〇

一



三河一欠戸桐の影の 柚のめりけ

臘月十音

安國殿お膳見物と云ふは

湯城ひぬ身よりくらくの梅

世とのうきくはかきいふ

あつちあつち臘月十日

あつちあつち梅の影

折る梅や雪の中や雪の影

冬梅や雪の酒屋の影

空梅や何や梅の影

大庭の竹の影や雪の影

雛子鳴く雪の影や雪の影

よみいふ雪吹の中や雪の影

病後

雪の梅や雪の影

雪の梅や雪の影







春を待つてはさきくちあはれもの思

春を待つてはさきくちあはれもの思

うらなひもあはれもの思

あはれもの思

仕こころはれもの思

あはれもの思

うらなひもあはれもの思

あはれもの思

あはれもの思

あはれもの思

あはれもの思

あはれもの思

あはれもの思

あはれもの思

あはれもの思

あはれもの思







古調

梅一里ん切多り越ん多の回

大抵母の十面志をとりこす

法道まぢぬりけく

身つゝや十年のあつた免糸

須美田川唯の

雪とらや大梅りの梅とらひ

左尔ま岳とたに毛やまに

あやま

とくや大つらもの梅まひ

羅漢寺のうら

大年やあま越あつらり入

あふらり河つらり返おれ鐘

いひ残寸さつらり除おのぬ

あま羅漢越つらりあまや除夜の鐘



安政二年丁巳秋  
不沙尾以甫書

伏尺粗年刻

新橋思藤終

一具養一具小傳  
一具庵一具姓高梨氏羽妙  
村山邦楯邑村人弱冠魁家  
游興州入岩城專稱古詩事  
良孔上人削髮學禪學成而住  
福嶋大圓寺。其風漸法化。晚味  
道風且盡俳諧之連歌從先達



乙二道人時習之。道人嘗其我。  
以心傳心。是以其語作句。若接。  
文及中。讓於弟子。任意以。  
脚東西。遂來者。結交由誓。由於以。  
力莫逆。一且僑於中橋北橋所。  
是其所相賢也。一具性剛毅。多子。  
交飾。初於人。嘗為。為何人。說。

而與羽水越及松前。以相餽之。知音相。  
識者。與彼步之徒。屬生來。而。其。  
於隣里之人。為語曰。一具師者。其。  
之師也。是仙臺乙二公。謂之。高乙。蕉。  
門一代。薛宗乙。在都下。操。柳。一。家。  
不知。何。安。乎。於是。於。人。始。知。  
其。為。有。德。之。人。入。門。肄。業。者。日。



多。時嘉永六年冬登鬼錄。多七  
十有三。其臨終也。有異聞之可記者。一  
月每月十日。曳杖突涉。觀世音報  
師恩也。十七日齋戒。往奉拜。緣山  
安國殿。或國恩也。若夫自詣。必使  
以人代己。又遠近諸家。又喜。隨來  
隨報。未嘗不之。是歲癸丑十月十日

芭蕉忘。與生徒夜坐。冒雪。伏枕。為  
月。至十一月十七日。課亡。年。頻。為。休  
浴。弟子知其。而止之。一日。不聽。徐  
步到。友生。盧月家。而沐浴。不快焉。  
主人。為調精饌。供之。一具。之。謝。生  
好。之。甚。月。家人。或。流。炭。火。鑪。或。進  
食。一日。靠。家。與。主人。語。曰。貧。是。別



子在途。以不逮見來人之再來。雖然  
吾不欲以病煩人。死則速死可。  
歡語數刻。頗入佳境。家人亦自  
傍少之。有笑祝千秋。俄而一息催。嘔  
氣。請喚壺。坐以待斃。急取湯進。一  
具。包吐盡。生以食物而歎。以為藥不  
及。一亦惶惑。奪出。去。周章。

死到。涕泣。執子。逝。我。為。余。叙。書。云。  
昔日。師。自。言。徑。及。某。某。某。告。之。曰。吾  
明日。閉。眼。也。葬。必。從。舊。送。喪。者。勿。過  
汝。亦。三。四。人。他。身。以。願。家。之。預。則。生。之。  
骨。身。流。之。吾。生。前。自。回。向。死。後。何  
依。他。力。為。鬼。成。佛。誰。能。生。之。勿。供  
香。花。勿。為。追。善。是。為。貴。也。先。生。沒。



海。仙臺。禾。月。庄。遙。書。畫。海。庵。清。室。  
旬。未。之。序。文。師。古。而。題。數。言。新。然。  
述。其。河。嶺。以。其。質。居。之。風。韻。遂。絕。筆。  
于此云余集錄其前後以聞者以為  
一具翁小傳如是。

安政二年十一月十日 海西漢夫成申撰

河海記云







